い揺れ
沖を震源とする地震から１年を迎えます

岩崎地内から撮影（令和元年10月10日）
まだブルーシートがかけられている屋根が見られる

市内の震度の記録

地区	震度
府屋	６強
寒川	５弱
岩船駅前	５弱
岩沢	4
三之町	4
塩町	4
片町	4
山口	4

■その時は突然に

寝床に入り、その日の一日を終えようとしていた午後10時22分、未だかつてない大きな揺れに襲われました。

令和元年６月18日、山形県沖を震源とする地震が発生。あれから１年が経とうとしています。

マグニチュードは6.7、緊急地震速報が流れる前に揺れはじめ、地域にただならぬ事態が起きていることがすぐに想像できました。まもなく、暗闇の幹線道路はパトカーが行き交い、上空には報道機関などのヘリコプターが轟音（ごうおん）をたてながら低空で飛行。震源地に近い府屋集落では震度６強を記録し、重傷者を含めたけが人が３人出ましたが、幸いにも死亡・行方不明者は０人でした。建物被害は、大規模半壊が３棟、半壊21棟、一部損壊が６２０棟を数え、大きな爪痕を残しました。

地震発生直後、各避難所には余震や津波の心配から多くの人が避難し、日付けをまたいだ午前０時30分には、指定避難所に最大８３６人が避難。そのほか山北地区では、19箇所に７２２人が自主避難しました。

■各方面からの支援の手

地震発生後すぐに、各方面からの支援が届きました。防衛省からは情報収集のために自衛隊の派遣、国土交通省からは※リエゾンの派遣や気象解説支援、県警からは機動隊やヘリコプターの出動、そして「チームにいがた」をはじめとした県内自治体からは83人の職員を派遣していただきました。

全国からは義援金のほか、物資も

新発田市立猿橋中学校から義援金を受ける

※災害対策現地情報連絡員のこと。国と被災市町村の間で情報や状況の連絡をとる人。

突然襲ったあの激し
6月18日 山形県

県内自治体から83人の職員派遣を受ける

被災した民家の瓦屋根を応急措置するボランティア

たくさん届きました。義援金は247件で約1千520万円、ふるさと納税による寄附は386件で約580万円、災害見舞金は26件で約300万円のあたたかい支援をいただきました。

また、建設業協会や管工事協同組合などからは協定に基づく支援も受け、緊急工事などの対応をしていただきました。

その他にも、正式なボランティアの受け入れは行っていませんでしたが、被災した瓦や家財道具の搬出を手伝う県外の人もおり、いつまで手伝ってもらえるか尋ねたところ「もう必要ないと言われるまで」と返してくれた言葉が、今でも印象に残っています。

■この経験を備えに

この地震は、昭和39年に発生した新潟地震、昭和58年に発生した日本海中部地震と同様に、日本海東縁変動帯で発生しました。大陸のプレート同士が衝突し圧縮運動が起きているため比較的大きな地震が発生しやすく、今後も注意深く見守る必要があります。

この経験を生かし、日ごろから備えを十分にしておくことが必要です。

福井県鯖江市からブルーシートの物資支援

罹災証明書発行のため家屋調査

神奈川県山北町からお茶の物資支援

皆さんが撮り溜めた写真をご提供ください

市では、この地震における被害、生活、行動などを検証および記録するうえで、皆さんが撮り溜めた写真を今後の災害対応に活用させていただきたいと考えています。

どんな写真でも構いませんので、次のメールアドレスに写真データを添付して送信してください。ぜひ、ご協力をお願いします。

メール：seisaku-k@city.murakami.lg.jp

～日ごろからの心構えが活動に生きる～

当時、府屋集落の消防団は21年ぶりのポンプ車操法の県大会出場に向けた訓練の日々を過ごしていて、地震発生時にも消防小屋で大会に向けた準備を行っていました。今までに経験したことがない揺れに、まずは、団員の家族の安否確認を最優先し、その後、津波の恐れがあったため、住民の避難誘導や警戒活動を行いました。

地震発生後、その場にいた団員が直ちにこのような活動に当たれたのは、日ごろの消防団員としての心構えができていたからこそだと思います。

今回の地震を経験して消防団員として思ったことは、まずは自分の安全確保、次に家族や親類の安否確認、そして、その後に消防活動に当たるということが大切だと思いました。

地震から約１カ月後のポンプ車操法の県大会では、５位という好成績を残すことができ、応援してくださった府屋集落の皆さんに明るい話題を届けることができたと思っています。

小田　貴広（たかひろ）さん（45歳／府屋駅前通）
村上市消防団　山北方面隊　第１分団
第１部OB（地震発生当時は部長）

1年前と同じ、おだやかな山北の時間に戻りつつあります

竹田　みゆきさん（39歳／府屋本町）
地震当時は妊婦（臨月）で、地震から約１カ月後に無事出産

～不安の中でも無事出産～

私は当時妊婦で、臨月に入り出産を控えていました。地震発生時、１人で２階の部屋で休んでいて、他の家族は１階にいました。とても大きな揺れとともに、崩れた壁の破片が顔にも落ちてきました。揺れが収まってから１階へ降りると、消防の県大会に向け練習に出ていた夫がすぐに帰ってきて、私たちを避難させてくれました。避難所では、もし今、産気づいたらどうしようという不安が頭から離れませんでした。

普段から非常用セットを用意していて、実際に避難所で役立った物も多く、備えておくことの大切さがわかりました。地震後から出産までの間は、何かあった時のことを考え、家に居てもなるべく家族の近くで過ごすようにしました。

地震から約１カ月後、無事に女の子を出産しました。子どもが産まれてからは、非常用セットに子どもの物を入れるようになりました。また、定期的に中身を見直すことも心掛けています。

あれから１年が過ぎようとしていますが、元気に成長する娘に癒（い）やされ、日々幸せを感じています。

この地震では、最大震度６強という大きな揺れにも関わらず、幸いにも誰の命も奪われませんでしたが、住宅などの建物には多くの爪痕を残しました。それらはまだ復興途中ですが、全国の皆さんからのあたたかい応援に支えられ、元のおだやかな生活を取り戻しつつあります。

今回、最も被害の大きかった山北地区のお二人から体験談をお聞きし、日ごろからの災害に対する心構えや備えておくことの大切さを教えていただきました。その中で改めて感じたのは、一人一人が置かれている環境によって、災害時に必要とされる行動や備えておくべきことが異なるということです。

一人一人がこの地震を教訓とし、改めて自分自身が行っている災害への備えを見直し、いつ発生するかわからない災害に対する準備をしておくことが大切ではないでしょうか。

また、現在市では沿岸部の自治会の皆さんと、津波からどう逃げるか一緒に考え、津波避難計画を作成する取り組みを行っていますが、新型コロナウイルス感染症対策のため、一時中断しています。新型コロナウイルス感染症が収束した後に改めて再開しますので、引き続きご協力をお願いします。